

スリランカ茶業の現状

吉留 浩・武田善行¹⁾・B.A.D.SAMANSIRI²⁾(宮崎県総合農業試験場茶業支場・¹⁾野菜・茶業試験場・²⁾スリランカ茶業研究所)

Hiroshi YOSHIDOME, Yoshiyuki TAKEDA and B.A.D.SAMANSIRI :

Current Status of Tea Production in Sri Lanka

平成7年度農林水産ゾーンバンク事業により1995年11月9日から12月7日(28日間)の日程でスリランカへ行き、主要茶産地を巡るチャ遺伝資源野外調査に参加した(第1図)。その際、スリランカ茶業の現状を見ることが出来たので、その概要を報告します。

1. 茶業の経緯

スリランカはインドの南端に位置する、北海道をひとまわり小さくした熱帯の島国であるが、インドと異なり茶業の歴史は意外と浅く、約130年前のさび病の蔓延によるコーヒー栽培の崩壊に始まる。イギリス人入植者により、インドから導入された種子をもとに作られた茶園は、1965年には最大の24万3千haにまで拡大されたが、1975年の国有化政策により生産が減退し、20万haに減少した。しかし、1992年には再民営化が行われ、現在は21の民営会社と2つの国営会社によって管理された400余りのエステートで22万2千haの茶園が栽培されている(第1表)。

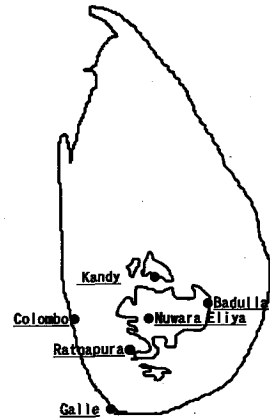
2. 現在の茶業

スリランカの茶業は、南インドから移住してきたタミル人労働者の安い労働力を背景に、紅茶を主体に生産しているが、茶園の多くは南部中央高地の急傾斜で岩石の多い地形に40～70年、100年生の古い実生茶園の形で栽培されているため収量は低く、茶園管理作業もほとんど機械化されていない。製茶もオーソドックス製茶法が主体で、高能率のCTC製茶法等は2.3%に留まっている。

茶業を標高別にみると、面積は高地(1,200m以上):33%、中地(600～1,200m):39%、低地(600m以下):28%と大差はないが、生産量は高地:31%、中地:20%、低地:48%と低地の生産量が多くなっている。この理由として、高・中地に比べ低地の茶園は比較的新しく品種茶園割合も高い、実生茶園も収量性の高いアッサム種の多いことが原因と考えられた(第2図)。

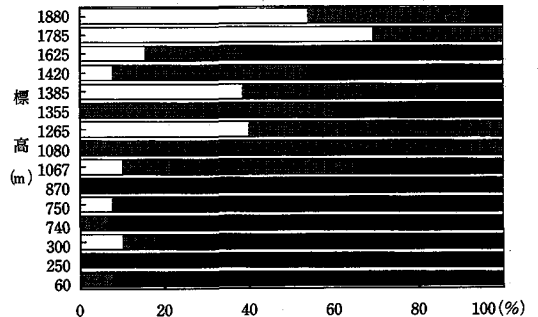
3. 今後の茶業

再民営化により茶園エステートは、経営の効率化が進められ、古い実生茶園も岩石が少なく傾斜の暖い茶園を中心に、品種茶園への改植が進められていた。日本、台湾向けの緑茶やヨーロッパ向けの有機栽培紅茶にチャレンジする意欲的な茶業者も有り、高能率のCTC製茶工場や新しい機械設備の整った工場も増えつつあった。また、スリランカ茶業研究所を中心として栽培・育種・製茶各種の研究と技術普及が進められており、スリランカ茶業の今後の発展が期待された。



第1図 スリランカの茶産地

□ チャイナ ■ アッサムHB ■ アッサム



第2図 実生茶園の標高別比較

第1表 現在の茶園エステートを管理する会社 (1995年)

Plantation	company name
Talawakelle (P)	Agalawatta (P)
Kahawatte (P)	Horana (P)
Kelleny Velly (P)	Madulsima (P)
Uda pussallawa (P)	Malawatta Velley (P)
Pussallawa (P)	Maturata (P)
Kotagala (P)	Bogawanthalawa (P)
Maskeliya (P)	Kegalle (P)
Namunukula (P)	Elpitiya (P)
Balangoda (P)	Elkaduwa (P)
Hapugastenne (P)	S.L.S.P.C (N)
Watawala (P)	J.E.D.B. (N)
Agarapatana (P)	

注) (P) : Private, (N) : National